

い。よって、FLVを副作用で中断した場合に、第2選択薬のPRXも副作用で中断するとは必ずしも言えない。

II. 特別講演

グルタミン酸機能障害による単一精神病仮説

東京医科歯科大学大学院

疾患生命科学研究所分子神経科学教授

田中光一

第269回新潟外科集談会

日時 平成21年12月5日(土)

午後1時30分～午後4時8分

会場 新潟県医師会館 大講堂(3階)

一般演題

1 8年間で8回の再発による手術を行なった後腹膜原発の脂肪肉腫の1例

齋藤 敬太・鈴木 聡・三科 武
二瓶 幸栄・池田 義之・三浦 宏平
荒井 勇樹・松原 要一・大滝 雅博*
鶴岡市立荘内病院外科
同 小児外科*

症例は47歳、女性。33歳時に回盲部の後腹膜原発の脂肪肉腫に対し、回盲部切除を施行した。術後はCyVADICを補助療法として行なったが、39歳時の回盲部の局所再発を皮切りに、以後8年間で腹腔内の多発性再発腫瘍に対し計8回の腫瘍摘出術を行なった。病理学的には再発を繰り返す

たびに腫瘍細胞の脱分化傾向を認め、より悪性度が高まったと想像された。現在は8回目の手術後7ヶ月が経過し、前回摘出不能であった腫瘍は増大し、他部位にも腹腔内再発を認めている。頻回の手術による合併症の出現や完全切除の難しさ、再発までの期間の短縮化などの問題で治療は難渋している。

2 巨大腹部脂肪肉腫の3手術症例

太田 一寿

太田西ノ内病院外科

〔症例1〕77歳、男性。腹腔内脂肪性腫瘍を指摘されていたが放置。腹部膨隆による呼吸困難を主訴に受診、右腎周囲後腹膜中心の巨大脂肪肉腫と診断された。平成20年8月5日手術を施行、腫瘍は約10kg、混合型脂肪肉腫と診断された。

〔症例2〕69歳、女性。腹部膨満感を主訴に受診、肝下面中心の巨大脂肪肉腫と診断され、平成20年11月19日手術を施行し、腫瘍は約8kg、混合型脂肪肉腫と診断された。

〔症例3〕64歳、男性。腹部膨満感を主訴に受診、右腎周囲後腹膜中心の巨大脂肪肉腫と診断され、平成21年2月13日手術を施行、腫瘍は約4.5kg、粘液型脂肪肉腫と診断された。

悪性軟部組織腫瘍は稀な疾患であるが、脂肪肉腫は約23%占め、発生部位は後腹膜が21%と下肢に次いで多い。治療は外科切除のみだが、根治的完全切除は極めて低く、切除後も十分な観察が必要である。

3 誤飲した金属針が十二指腸下行部から膈頭部に迷入した1例

角南 栄二・黒崎 功*・畠山 勝義*
白根健生病院外科
新潟大学大学院消化器・一般外科学分野(第一外科)*

症例は50歳、男性。

【既往歴】精神疾患の既往なし。

【現病歴および経過】平成18年6月下旬右季肋